

〔課題名〕 粗生産額3,000億円の十勝農業を目指して

〔報告書No.〕

〔研究年度〕 平成9年度

〔研究者〕 天間 征, 畠山 尚史

1. 目 的

本研究は地域計画センターからの受託課題である。十勝地域の農業粗生産額が3,000億円に達成するための具体的な対策と施策を計画する。

十勝管内の粗生産額は昭和57年に2,000億円を達成して以来、その後、幾多の冷害にまわられながらも2,000億円台を維持し、豊況・豊作年には2,300億円台までも実現してきた。しかしながら、十勝地域の総農業生産額の5割近くが政府の価格支持制度の下にあるといわれており、その価格支持制度がWTO交渉や「農政改革大綱」にみられるように縮小を余儀なくされ、将来、市場原理活用型農政へ転換されるということになれば、3,000億円の達成にはこれまで以上の困難が予想される。

まずはじめに3,000億円農業達成のために考えられることを整理した。

- 1) 将来には馬鈴薯、甜菜、豆類、小麦などの既存の主要な農産物の反当収量を約3割引き上げること
 - 2) 北海道が目指す「クリーン農業」実現のために、現状より約3割の減農薬・減肥料の農業生産方式への転換を行うこと
 - 3) さらに新たな高収入・集約作物群として、野菜類の作付を大幅に増やすこと
 - 4) 畜産では経産牛1頭当たり乳量を現状よりも3割程度増産すること、ホルスタイン乳牛や黒毛和種を用いた素牛供給体制を改め、肥育までの一貫飼養体系の確立と肥育牛供給頭数の飛躍的拡大すること
- などを実現に向けた基本的条件とした。

2. 方 法

基本的な分析方法は十勝支庁、管内の農業改良普及センター、市町村農協を対象にしたヒヤリング調査と資料収集により計画案を作成した。

まずはヒヤリング調査により現地の農業関係者の提案を整理した。3,000億円農業実現のためのフレームワークとして、畑作振興、野菜作振興、酪農部門の振興、肉牛生産部門の振興に分けてそれぞれの実現可能な条件を設定した。

3. 成 果

農業粗生産3,000億円の実現に向けて四つの側面からその可能性を追求した。一つは生産流通振興対策、二つは将来の経営規模、三つは農業者支援組織、四つは酪農・畜産振興の施策についてである。

まず一つ目の生産流通対策に関しては、①十勝全体を対象とする広域産地体制の確立(安定供給、共同選別施設、共同貯蔵施設の形成、「十勝の野菜」のブランド)、②雇用労働力の確保、共同作業・大型機械の共同利用体系の推進、作業受委託組織の普及充実、③作業効率を重視した高能率・低コストの専用作業機械の開発、④販売対策の充実及び価格安定対策(系統の総合力結集)と契約生産方式の導入、⑤加工向け・加工品の新たな開発、⑥ダンボールなど生産資材のコスト低減、輸送コストの削減、⑦野菜規格の簡略化によるコストの引き下げ。

二つ目の将来の経営規模に関しては、十勝地域では将来、野菜専業経営で20ha、畑作専業経営で60ha、酪農専業経営で120ha規模を考えることもできうる時代となりつつある。このような諸経営を将来、広範囲に創造するためには、明治中期に行われた「殖民区画制度」に立ち戻って考えることが必要となること。殖民区画事業では、300間ごとに縦横に道路を開き、それら号線道路に囲まれた約30haを6等分して一戸分5町歩として入殖者を導入した。十勝の農業指導者たちの多くは、大型自走式の専門的農業機械の開発普及状況から600間うねの圃場造成の必要性を訴えていることから、新たな殖民区画として600間×600間の号線道路に囲まれた1区画120haを究極の農場規模単位と考えることが必要になることを提唱した。

三つ目の農業者支援組織に関しては、ファームコントラクタと経営管理支援型組織の形成と充実した運営の必要性を提唱した。前者では十勝全体で農耕地の20%がコントラクタの受益地となっているといわれている。規模拡大と作付の多様化からこの傾向はますます加速化されるとみた。そこで、コントラクタ企業の経営安定のために必要な条件としては、委託作業需要が充分存在すること、作業料金の回収に困難性がないこと、多大な機械投資額が必要とされることから、低金利資金や補助金の導入が可能となること、冬期間の積雪期においても農業内外の委託作業需要が存在すること、劣悪耕地のみを委託に出すという生産者の圃場選別行動が解消されることなどをあげた。後者では、経営管理支援組織としてはいまだ一部の農業者がこれを利用する段階にあり、そのことが地域の経営格差を拡大する傾向にある。できるだけ多くの生産者がこれらの支援組織を利用することが求められるとした。

四つ目の酪農・畜産振興の施策に関しては、個体乳量の向上とり粗飼料給与水準の向上をあげた。草地反当生産は5t以上を目標に設定し、そのためには草地の適正なる更新、肥培かんがいの実施、早刈りを含めた3回刈り取りの実施、集約輪換放牧の実施、貯蔵粗飼料に対する品質保持努力をあげた。土地利用型酪農の展開を基本にした十勝酪農の特性とブランド化を提唱した。また肉牛振興では、飼養管理技術の確立、十勝銘柄牛としての良質肉牛生産の確立、系統の販売流通体制の見直しと十勝牛銘柄の確立、広域体制による疾病予防、ふん尿処理システムの構築と低コスト化、価格安定対策の充実をあげた。

4. キー・ワード

十勝農業粗生産額，農業振興，農業者支援